

連載  
第39回

## 福聚山史

池浦 泰憲 文  
及川 一晋 編

## 戦後復興から現代へ

## 9、「成子会」

—真学上人の教えを受け継ぐ—

常円寺には「成子会」という、常円寺に「隨身」して生活をした人たちの親睦会がある。戦後、常円寺で生活した人々たちによるこの会は、現在まで述べ百人を超える人数になっている。

「隨身」とは、辞書にしたがえば「お寺に寄食して寺務を手伝い住職の世話をする。またその者」という意味になるが、常円寺に寄宿し、日々の生活を通じて僧侶として学び、修行生活を送るということである。常円寺では「隨身さん」とよばれたり「学生さん」と呼ばれたりしている。

常円寺に「隨身」として生活する人々はさまざまな事情・境遇がある。常円寺に来ることになったきっかけはもちろん、年齢も、お寺に来るまでのキャリアもさまざまで、常円寺に寄宿しながら大学に通う人もあれば、大学を卒業してからお寺に入る人、サラリーマンを辞めて修行に入るなど、多種多様な人々が常円寺で共同生活をし、ともに修行の日々を送ってきた。

そのような多種多様な人の共同生活には一つのルールがある。それは、お寺に入った順番で先輩後輩の序列が決まることである。たとえ年齢が上でも、ほかのお寺で修行した

キャリアがあるうとも関係ない。極端にいえば同じ日に修行生活を始めても、一分一秒でも先に一歩足を踏み入れた者が上座となり、その序列にしたがってお寺でのさまざまな場面で順番が決められているのである。

この「成子会」に属する半数以上は、三十七世及川真学上人のもと（戦後すぐから平成四年まで）で「隨身」生活を送り、この人々にとって常円寺での修行は「真学上人の教え」として成り立っているといっても過言ではない。たとえば、今でもそれは変わらないが、常円寺での食事は、御前さまをはじめ、お寺で生活する人間が一つテーブルで同じものをいただく。隨身は御前さまと同じお風呂も使わせていただく。身延山での修行後、常円寺に隨身したある上人は、こんなに大きな寺院の位の高い御住職が、学生と同じ風呂に入り、同じ台所で、ほとんど同じ食事をされるといふ光景を不思議に思ったということである、これは真学上人の「仏道修行においては師匠も弟子も同じ」という考えからである。またあるとき、ある隨身が「修行を具体的に言ったら、何になるでしょうか」と尋ねた。すると真学上人は「祈ること、お経をあげる、それに掃除だな」と答えたという。多くの隨身にとって常円寺での生活に廊下の拭き掃除や、境内の掃き掃除の思いが残っているようで、お経は僧侶の修行には当たり前であるが、人としても生活の基本である「掃除」がきちんとできるということも、身につ

けるべき大事なことなのである。

常円寺での修行期間も長ささまざまである。自分の生まれたお寺に帰る人、別のお寺に入る人、道もそれぞれである。実は「成子会」の中には僧侶ではない方もおり、常円寺に寄宿しながら学校に通学して僧侶とは違う勉強をしていた人もいた。それぞれが目標をもつて常円寺で生活していたが、多くの人々にとって自ら進むべき進路に悩む時期でもあった。

ある学生は、立正大学に通いながら、実は別の大学を目指しジャーナリストを志向していた。その夢を叶えるべく、常円寺を出、下宿生活に入りたい思いを叱られるか、待てと説得されるかと思いつつも意を決して打ち明け、「よし、やれ。頑張れよ」との後押しという言葉を受けた。その力強い励ましで、学生は次の年の大学受験をパスし、念願の新聞社に入社してジャーナリストの夢も叶ったという。真学上人は細かな規則で隨身を管理し教育しようとはされなかったというが、隨身生、学生一人ひとりのすがたを見、おのおのが個性を伸ばし、巣立よう見守っていたのであろう。

…成子（常円寺）で育った人たちが各地でそれぞれ活躍しているようで頼母（たのぼ）しいことです。

花のみを待つらんに

山里の雪間の草の春をみせばや

という歌を思い出して、花々しい姿のみが春ではなくて、目立たなく静かに、たゆま

ず春を演じていることも大切だと思えます。

これは、真学上人が成子会の方に送られた手紙の一節であるという。「花のみを待つらんに」は鎌倉時代の歌人藤原家隆の歌



で、「春といえば、花の咲くことばかりを待っているような人には、山里の溶けた雪間から顔をのぞかせている若草にある春の風情をみせたいものだ」との意。誰に認められなくても、たとえ報われることがないとしても、自分の場所で地道に生きていく、常円寺で学んでいった人々に対するそんな思いが現れた言葉であろうか。

真学上人は平成四年（一九九二）三月十九日に遷化されたが、その教えは現在まで受け継がれている。常円寺で学んだ多くの「成子会」の人々によって今、そして将来においてもその教えは受け継がれ、各々が各々の世界で活躍していく素地となっていることである。

（参考『本妙院日修上人追憶集』平成十年（一九九八）